柿木II遺跡

——群馬中央倉庫株式会社
倉庫増設予定地の調査——

1988

群馬県前橋市教育委員会

柿木遺跡報告書の刊行にあたって

群馬中央倉庫株式会社
取締役社長
尾崎　博治

今般私どもの倉庫建設予定地に古代の文化遺産が埋もれていることを知らされ、早速前橋市教育委員会に依頼しご指示に従って発掘作業を実施いたしました。その内容については、本書に詳細にとりまとめてございますのでご覧いただきたいと存じます。

正直なところ、もの珍しさだけで発掘作業を傍観しておりましたが、作業が進むにつれ「かまど」が現れ「土器」が目にとまるようになりますと、この地でこの場所で、私達の先人が「かまどで炊き」「土器に盛る」という生活を営んでいた厳然たる事実に直面せざるを得なくなって参りました。すると、傍観者たるはずの私達でさえ数百年もの時代をワープし、遙かな古代の一部をかいま見たような神聖な気持ちになり、自分達もこの歴史の流れの上に点在しているちっぽけな存在であることを思い知らされ、自然のすばらしさ、人間のたくましさを強く感じ、感慨無量となりました。

また、今回のことで日本史の研究のほんの一端でも貢献できたかと思うと満足感でいっぱいです。

最後になりましたが、初夏とはいえ照り付ける暑さの中で根気よく作業を続け、このような立派な報告書をまとめていただいた前橋市教育委員会の皆様をはじめとする関係各位に、あらためて深く感謝申し上げます。

平成２年５月

は　じ　め　に

前橋市は関東平野を一望できる雄大な赤城山を北に、坂東太郎で名高い利根川や詩情豊かな広瀬川が市街地に清流を迸らせる、水と緑にあふれた美しい県都です。

遠い古墳文化の時代には、東国最大の豪族、上毛野氏が赤城山南面を中心にして栄え、律令政治の時代に入ると、元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分寺も立ち並び、奈良の都のような一大政治文化圏が形づくられてまいりました。

市の西部にある総社・元総社地区は古代上野国の中枢地域であり、数々の歴史的遺産が残されているにもかかわらず、区画整理・工業団地・関越道等の開発に伴って、その変貌の激しさには目を奪われるものがあります。特に、関越道前橋インターチェンジの供用開始後の変わり様は市内で特に著しく、田園風景を見ることが少なくなっています。

このたび群馬中央倉庫株式会社が、総社地区における開発計画を教育委員会に申し入れ、関係諸方面の御協力により発掘調査の運びとなりました。調査の結果、この付近では縄紋時代の昔から人々が生活の場としており、奈良・平安時代には、多くの家々が立ち並び、1984年に発掘調査された柿木遺跡と同一の集落を形成することが明らかとなりました。

現状のままでの遺跡保存は無理でありましたが、今後、調査にともなう幾多の遺物等や記録資料をもとに社会教育・学校教育の場に極力活用していく所存であります。

最後に物心両面で援助をいただきました群馬中央倉庫株式会社に厚く御礼を述べると同時に、発掘調査・遺物整理を円滑にすすめられたのは多くの関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、考古学研究の参考になればさいわいと存じます。

1988年3月

前橋市教育委員会

教育長　岡　本　信　正

目　　次

はじめに

頁

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地……1

2　歴史的環境……3

Ⅲ　調査のの経過

1　調査方針……3

2　調査経過……3

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺構について……6

2　遺物について……13

3　遺物観察表……16

まとめ……17

例　　言

1　この報告書は、群馬中央倉庫株式会社（前橋市高井町１丁目28番地－７　取締役社長　尾崎博治）の倉庫増設に伴う造成予定地における発掘調査に関するものである。

2　調査は、前橋市教育委員会文化財保護課が担当し、遠藤和夫、駒倉秀一、園部守央、鈴木雅浩、都所敬尚、加部二生、新保一美が参加した。また、調査にあたっては、群馬中央倉庫株式会社にその経費と庶務について協力を得た。

3　本書の編集・執筆は、遠藤和夫の協力を得て新保一美が担当した。

4　本書の遺物の実測・挿図は綿貫綾子他の協力を得た。遺構写真は担当者全員で、遺物写真は新保一美が担当した。

凡　　例

1　本遺跡は旧小字名の柿木をとったが、隣接地で柿木遺跡の名称を用いているため、柿木II遺跡とした。略称は63Ａ30である。

2　各遺構の略称は次の通りである。

　Ｈ－住居跡　　Ｗ－溝跡

3　遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

　住居跡　１／60　　溝跡　１／60　　全体図　１／200

　土器・石器　１／３

I　調査に至る経緯

昭和61年４月９日付けで、群馬中央倉庫株式会社尾崎博治氏より、前橋市高井町一丁目28番地７、28番地13（1,230m²）における倉庫建設に先立つ表面調査依頼が提出された。この地域は、既に区画整理が行われているものの、隣地で平安時代の集落等が発掘調査されていることから、同６月９日に試掘調査を実施した。その結果住居跡と溝跡が検出され、工事着工前に発掘調査を実施することで合意をみた。

その後昭和62年７月13日に、整地のための削平についての問合せがあり、７月23日に、遠藤・新保で現地立ち会いをした。

昭和63年４月16日に、工事に先立ち、発掘調査依頼が提出され、協議の結果、前橋市教育委員会文化財保護室が調査を担当し、調査に要する費用および施設等については開発行為者である群馬中央倉庫株式会社の全面的協力を得て、原因者負担として発掘調査が実施されることになった。

調査面積は1,230m²で、倉庫建設予定地の全敷地に亘り、昭和63年４月19日から、同５月９日までの３週間の調査であった。

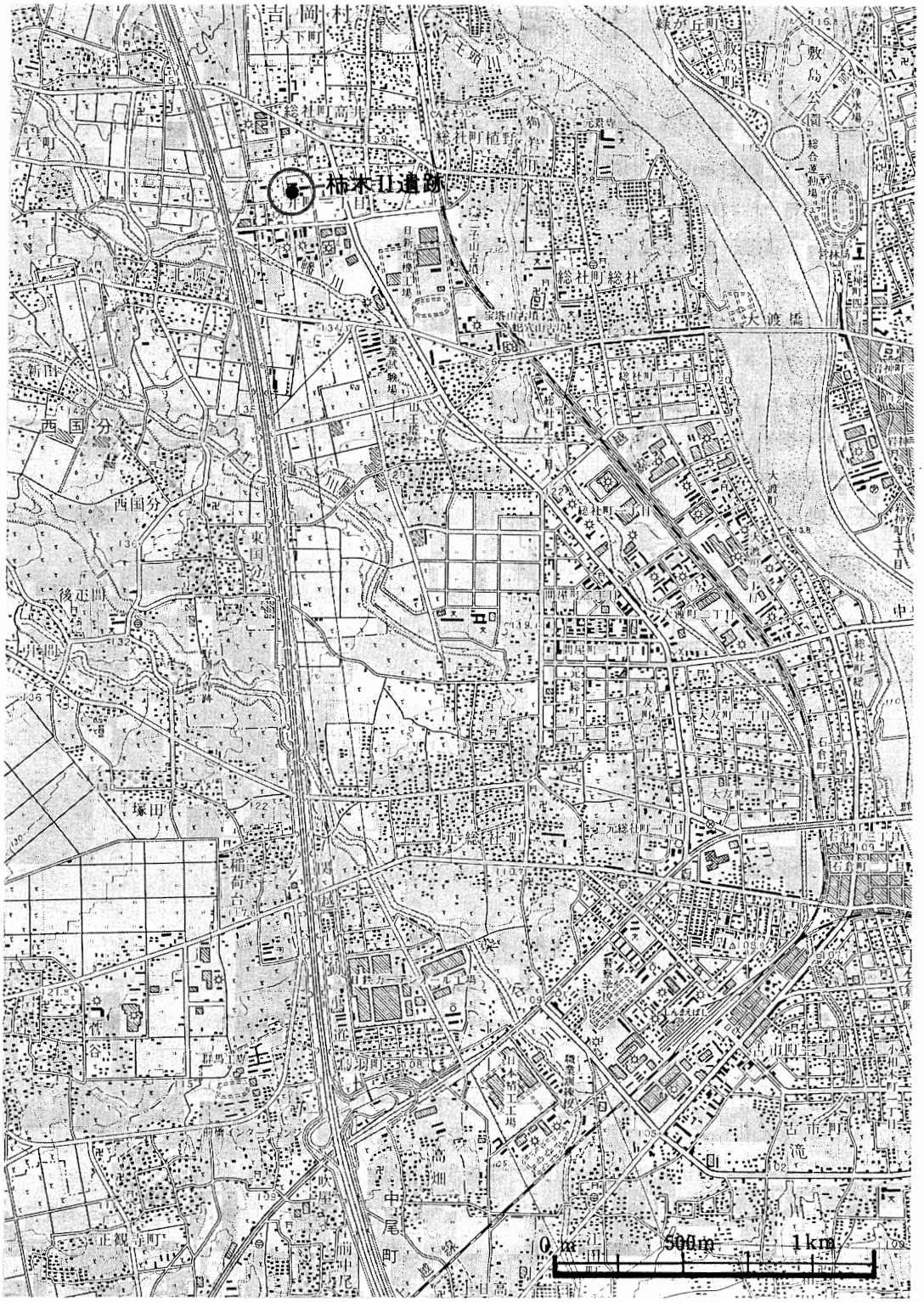
なお、遺跡名は昭和58年度に発掘調査が実施された柿木遺跡に接していることから柿木II遺跡（63A30）とした。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

柿木II遺跡は、総社歴史散歩道の一角、前橋市高井町一丁目に所在し、利根川の右岸、前橋市の市街地にある県庁から北西約４km、ＪＲ上越線の南西群馬総社駅から南西約600mに立地する。遺跡の西側約400mには関越高速道があり、市道大友西通線（通称産業道路）と県道南新井・前橋線の交差点から南西200mの所にある。

遺跡は前橋台地の標高約140mにあり、北西から南東にかけての緩やかな傾斜地上にある。榛名山を給源とする中小河川は東南方向に並走し、数多くの台地を細長く開析している。柿木II遺跡は、このように牛王頭川と八幡川によって開析された台地上にあり、八幡川はこの付近において比高４mにおよぶ深い崖を形成している。この流下水位の低下に伴い、現在遺跡地周辺は高燥化しているが、数十年前には、遺跡地の東側の道路の辺りに女堀と呼ばれる水路が存在したということである。これについては、いつ頃から存在したのか、また人工の水路であるとすれば何のために開削されたのか全く不明であるが、南南東1200mにある山王廃寺の脇に、やはり女堀が流れていたという。この二つの水路は一体の可能性が高い。



柿木II遺跡位置図

2　歴史的環境

本遺跡地周辺は、昭和40年代に区画整理がなされているが、この区域は古代から開けた地として先人の足跡が数多く残されている。東方800mには二子山古墳があり、愛宕山・宝塔山・蛇穴山・遠見山の各古墳が連なっている。南南東1200mには、放光寺ともくされる山王廃寺があり、その延長上でさらに1800m程の辺りに推定国府域が存在する。また、南方1800mには、東西に国分尼寺、国分寺がならんでいる。

このように重要な遺跡が各所にあるため、関越自動車道の下は、約4kmにおよぶ発掘調査がなされ、区画整理に伴う推定国府域の発掘調査は昭和57年以来現在も、前橋市教育委員会文化財保護室の手によって綿密に行われている。また、周辺の民間開発に伴う多くの埋蔵文化財確認のための調査と、それによって生じた発掘調査により、この区域の古代の実相の一部が着々と解明されつつある。周辺においては、本遺跡に接する柿木遺跡があり、南方には約110m離れて小規模ではあるが膏薬遺跡が存在する。

III　調査の経過

1　調査方針

隣地の柿木遺跡にならい、4m方眼のグリッドを設定し、試掘調査の結果を参考として、重機による表土の掘削を行い、プランを確認して直ちに調査を開始した。

(1) 住居跡については十文字にセクションベルトをかけ、土層の観察を行う。

(2) 遺物については、縮尺1／20のドットによる分布図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に属性を記載する。

(3) 竈の図化については、縮尺1／10、遺構平面図については、縮尺1／20で実施する。

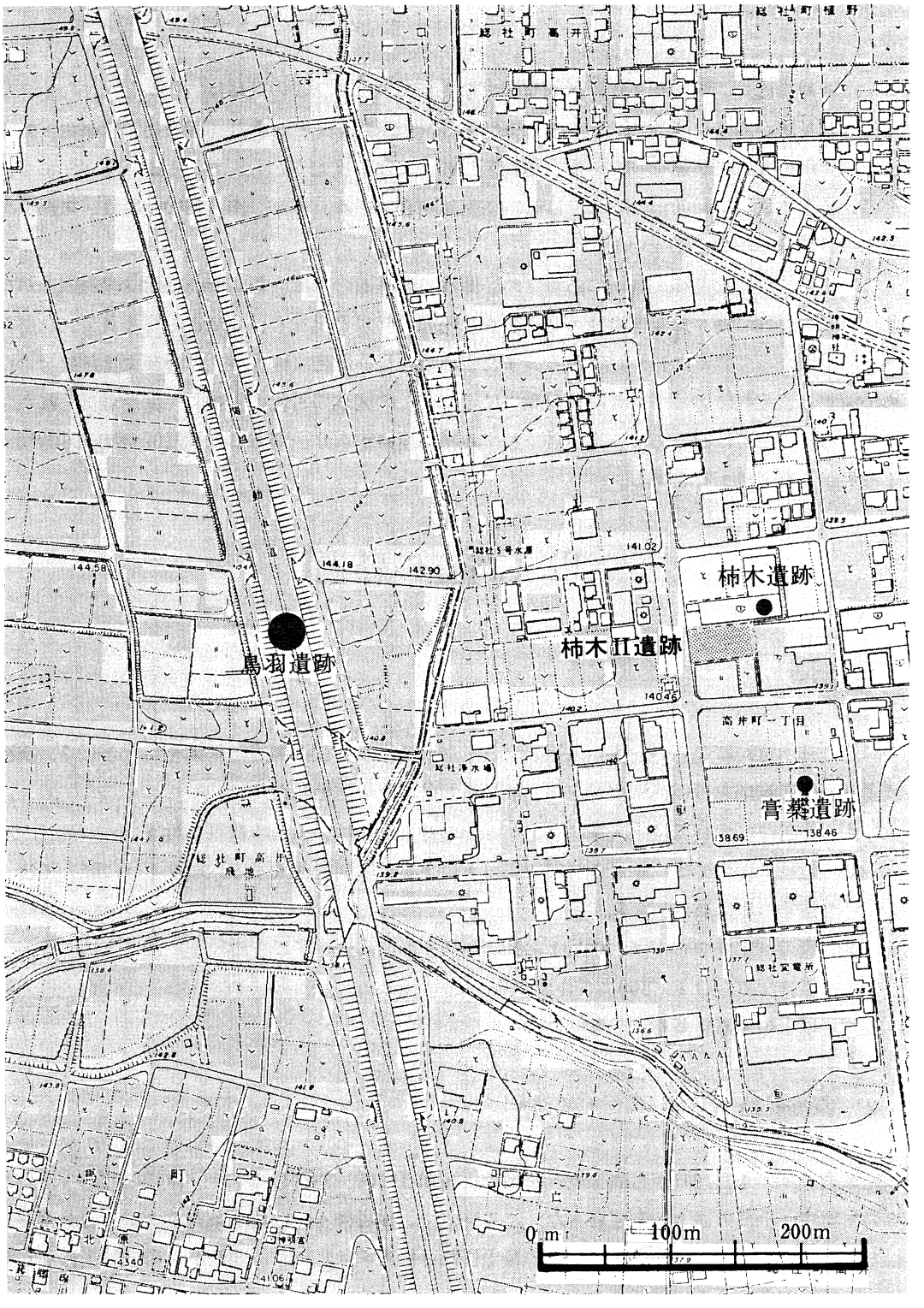
(4) 遺構配置図は1／100にて作成する。

以上の4点を基本方針とした。

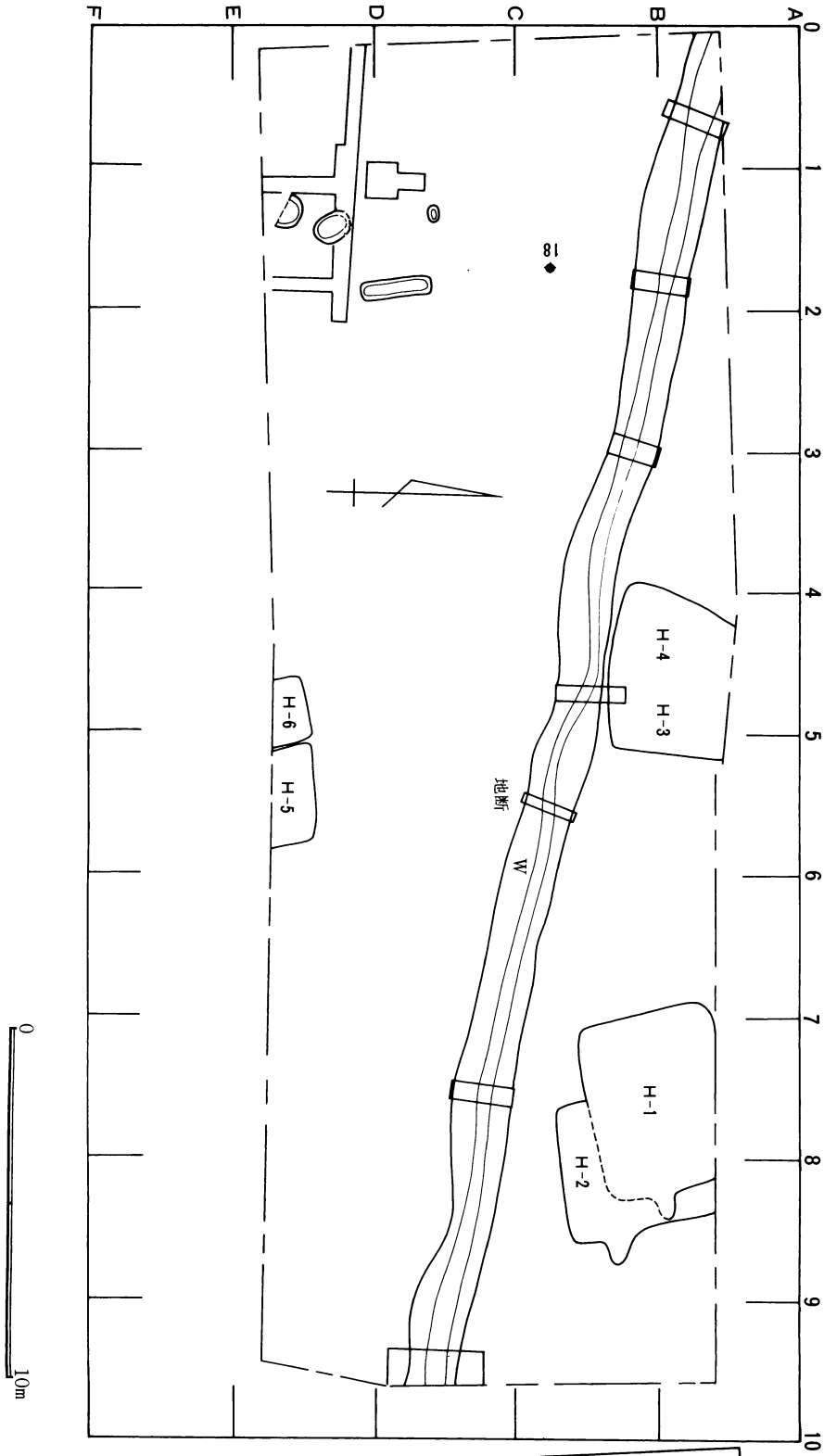
2　調査経過

発掘調査は、4月19日から表土剥ぎを始め、翌20日には、並行してプラン確認にはいった。20日の午前中に全ての表土が剥ぎ終った。この時点で、住居跡4軒と溝1条、焼土1ケ所を確認し、直ちに人員を割りふって並行して住居の覆土排除と精査をはじめた。北西から南東に走行する溝に関しては、7ケ所の地層断面をとり、走行を平面に図化することにした。

調査は天候に恵まれ、作業員の手配を始め、群馬中央倉庫株式会社の全面的な支援をうけ、ゴールデンウィークの中断はあったものの、すこぶる順調な進展であった。



柿木II遺跡周辺図



遺構全体図

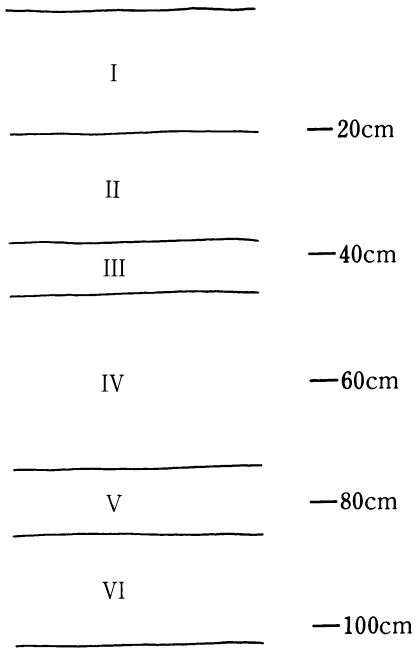
Ⅳ　遺構と遺物

遺構の概観

本遺跡の調査地は、昭和40年代に区画整理が行われており、本来は北西から南東へかけての緩やかな傾斜を呈する地形であった。これは、遺構の確認面が、西側で30cmと浅く、調査区の東端では約60cmに達することからも首肯できる。そしてこの傾斜に沿うように調査地のほぼ中央に溝が一条走行しており、この溝の北側に検出された住居跡は、奈良・平安時代の住居であり、隣地の柿木遺跡と同一集落を形成するものと考えられる。

基本層序

この地区に顕著に見られる高粘質の黒褐色層は、浅間山や榛名山を給源とするパミスやスコリアを含む氾濫堆積層で、このⅢ層が遺構確認面となる。しかし部分的には、この層が認められずⅣ層の茶褐色ロームを確認面とする。



Ⅰ　耕作土
Ⅱ　耕作土と黒褐色砂の混合
　粘質でやや締まる粗砂。5㎜φ ＦＰ15%含有
Ⅲ　黒褐色微砂　高粘質で締まりあり。2ｍφ
　ＦＰ３%含有
Ⅳ　茶褐色ローム
Ⅴ　灰褐色ローム
Ⅵ　灰褐色ロームと砂礫層
Ⅶ　シルト質

1　住居跡

H－1号住居跡

調査区の中央を横切る溝の北側で、東側の重複住居の内側に位置する。住居の北壁は、安全対策上掘り残した部分に入り込み完全には調査できなかった。住居の規模は、調査範囲内で南北軸（3m80cm）、東西軸は5m80cmと推定される。住居の隅は鈍角に拡がりをみせ、はっきりとした長方形を示していない。竈は二つあり、南側の竈は長軸で80cm、焚口幅60cmを計る比較的大きい竈で、壁面に対して約20°北に振れている。これからは僅かな遺物辺と砂質凝灰岩の切り石断片が検出されただけであり、焼土の量も北側のそれに較べると少なかった。

北側の竈は長軸約100cm、焚口20cmの細長い形状を呈し、東壁に対して10°南に振れる。竈内からは、コの字を呈する口縁を持つ薄手の甕がほぼ一個体分検出されている。この竈も袖材として砂質凝灰岩を用いていたと思われ、竈前から断片が出土している。竈の前の床面は、固く踏みしめられた部分がなかった。これらの事実からすると、この二つの竈は、同時に使用されたのではなく、なんらかの不都合が生じて本来の竈の北側に新たに竈を作り付けたと考えられよう。重複した住居であるという条件はあるものの、堅徴な面がないことは、その使用度数は少なかったものとも考えられる。

H－2号住居の内側にありながら、H－1号住居は竈が壊されていないことから、H－1号住居の方が新しいと思慮される。

H－2号住居跡

H－1号住居に平行する形で南東に寄った位置にある。東西軸4mを計る。住居の形態は長方形を示すと考えられるが、南北の軸長は、H－1号住居で切られており、床面のレベルに差がみられなかったため、その長さは不明である。また、竈から北の壁面は、H－1号住居の竈の地山と判別がつかず、推定線とした。

竈は、長軸130cm、短軸44cmを計る。主軸は、8°南に振れる。竈内からは、薄手のコの字を示す口縁の甕が検出されたが、復元するには、至らなかった。

遺物は、その大半がH－1号住居からの出土であり、H－2号住居からは、土師器・須恵器の小破片が検出されたのみであった。また、H－1号住居の東壁上部に緑釉陶器の破片が検出されたが、その出土状態から、流れ込みの遺物ではないかと考えられる。

H－3号住居跡

遺構確認面で既に須恵器の断片が現われる状態であった。この住居跡の重複部に接する位置に溝跡がある。住居の床面までの深さは、14cmであり、かろうじて残ったものと思われる。東側に

位置する住居をH－3号とした。この住居跡は、調査範囲で東西軸2m90cm、南北軸（3m25cm)の南北に長い長方形を呈すると思われるが、南北壁は、調査区外となるため完全には検出されなかった。竈跡は焚口の部分がわずかに残されていた。

H－4号住居跡

H－4号住居跡は、H－3号住居跡と南に接する溝跡に切られており、その大きさは不明であるが、調査範囲で東西軸（2m8cm)、南北軸（2m88cm）の方形を呈するとおもわれる。この住居跡はH－3号住居跡に切られており、H－3号住居跡が新しいと判断される。

H－5号住居跡

東側に位置する住居跡をH－5号住居跡とした。西側に並ぶH－6号住居跡にその西側を切られ、南側を調査区外とするため、その全貌を明らかにすることはできなかったが、東西軸2m68cm、南北軸（1m40cm）を計り、方形を呈する住居跡と思われる。住居内の東北隅から砥石1点が出土したほかは、砂質凝灰岩の切り石断片が出土している。

H－6号住居跡

調査範囲で東西軸2m16cm、南北軸（1m40cm）を計る。土師器の断片を検出したが、小片のみであり、竈の検出にも至らなかった。

この住居跡は、東壁を有することから、H－5号住居跡よりも新しいものと判断される。

2　溝

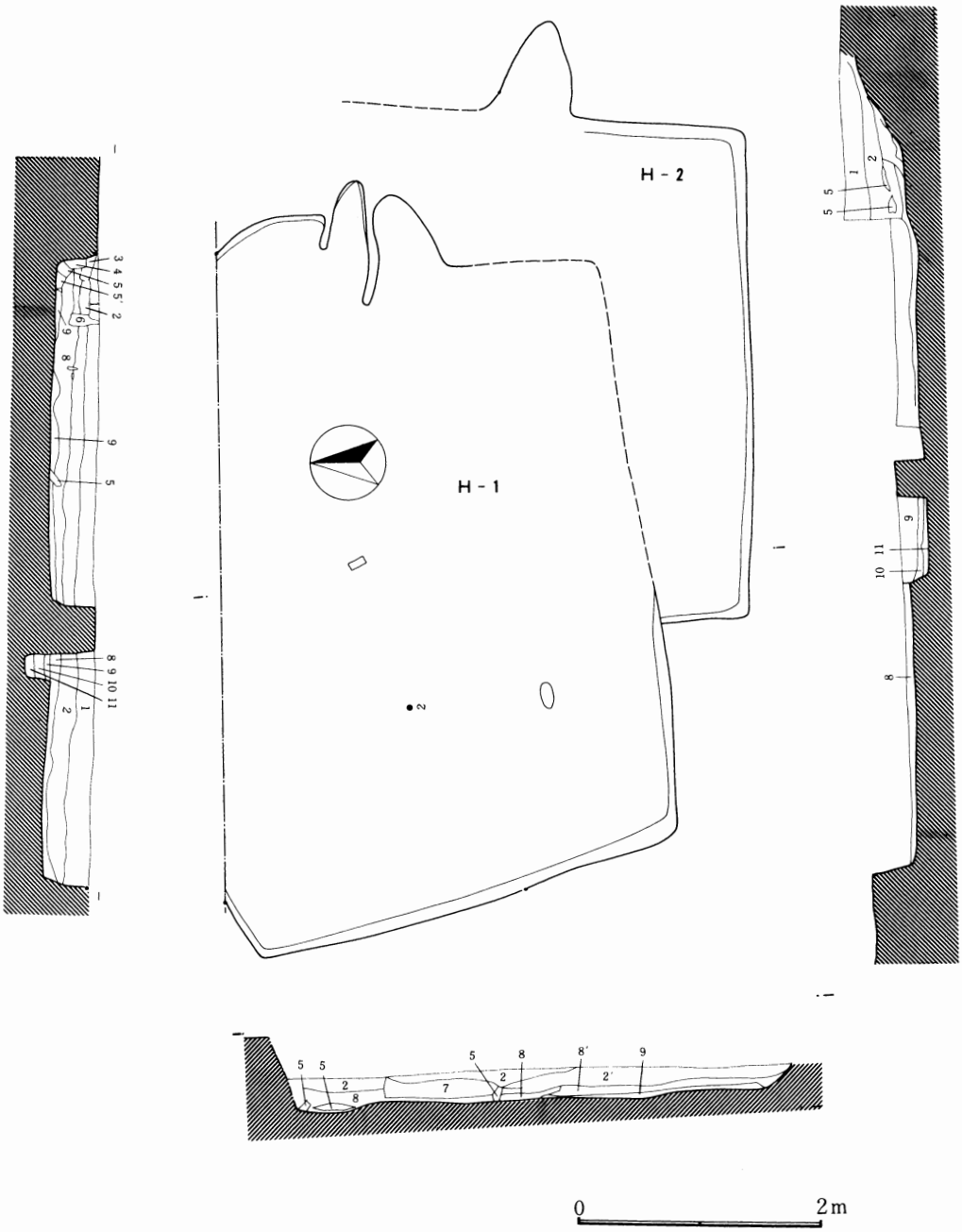
調査区内のほぼ中央を、西北西から東南東に走行する溝が1条検出されている。その埋土からは上層から最下層まで、浅間山に起因するB軽石層が認められる。したがって、平安時代の溝と推定され、隣地の柿木遺跡で調査された溝と何等かの関連があるものと考えられる。

3　その他の遺構

調査区の南東隅で、試掘調査時に焼土の痕跡が認められており、トレンチを入れて確認をしたが、竈跡と認められるものの削平を受けており、竈底部の焼土が残存するのみで、住居跡としてプランを識別することはできなかった。

また、土坑が4基検出されているが、いずれも時代を判定するにたる遺物等の発見には至らなかった。

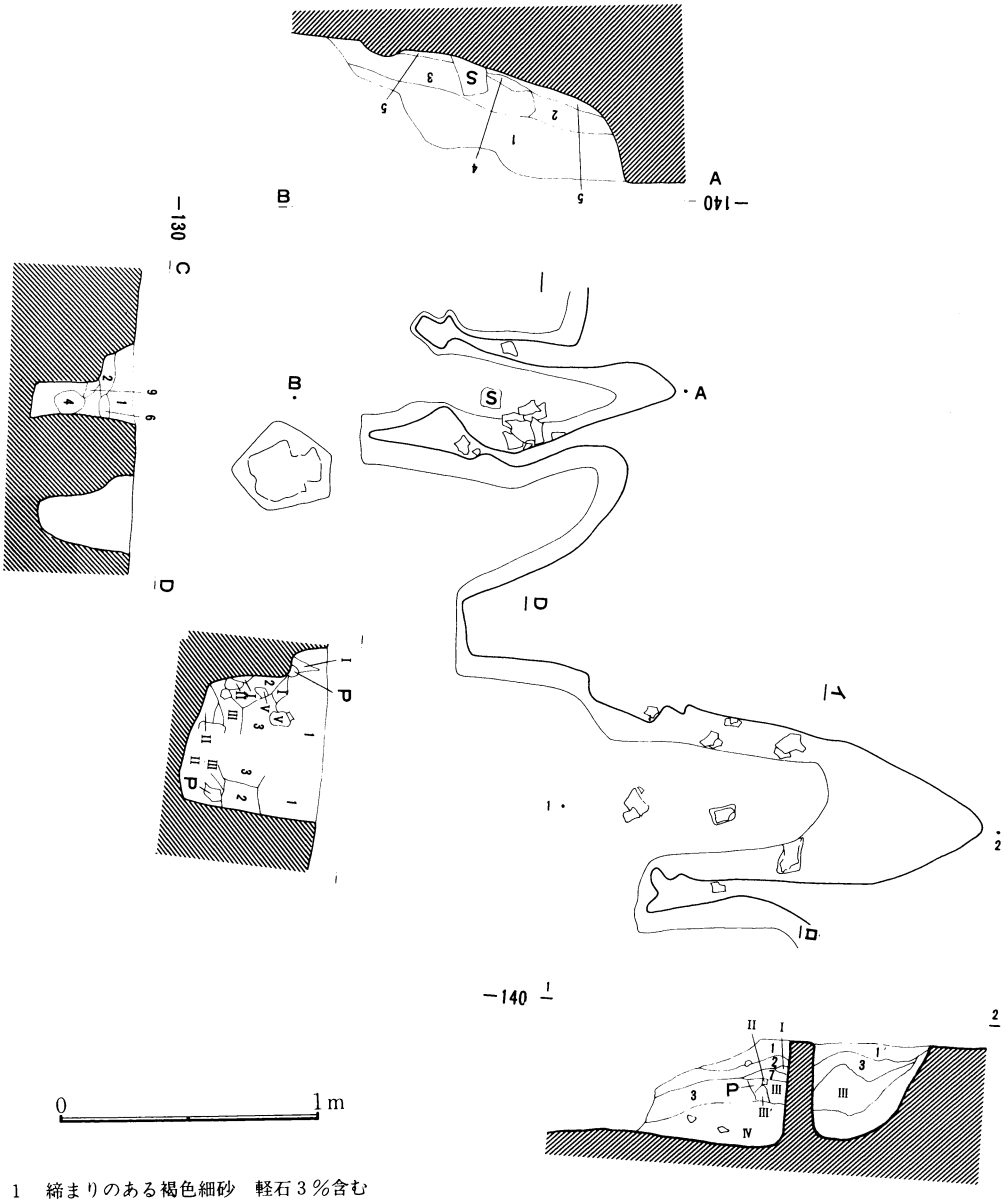
H－1・2号住居



H－1注記

1　締まりの強い暗褐色細砂　5㎜径の軽石10％を含む
2　締まりの強い黒褐色粗砂　8㎜径の軽石15％を含む
3　締まり粘性に欠ける黒色細砂
4　締まり粘性のある褐色細砂　3㎜径軽石3％を含む
5　ロームブロック　2～3㎜径軽石3％を含む
　締まり粘性のあるロームブロック　軽石3％を含む
6　植物根の侵入痕
7　暗褐色細砂　軽石3％を含む
8　締まり粘性の弱い暗褐色細砂
9　黒褐色細砂　軽石3％を含む
10　やや締まり気味の黒褐色細砂
11　やや締まり粘性を帯びた黒褐色細砂　軽石1％を含む

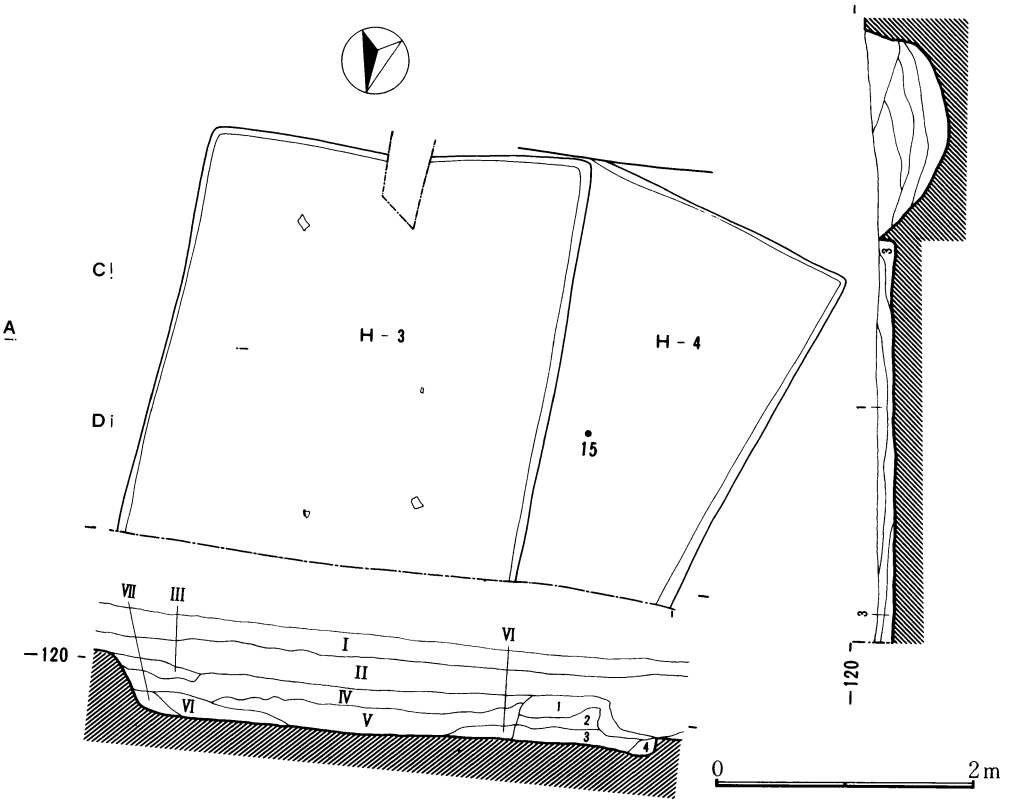
H—1・2号住居カマド図



1　締まりのある褐色細砂　軽石３％含む
2　締まりのない黒褐色細砂　軽石３％含む
3　やや締まりがあり粘性の強い暗褐色細砂
4　やや締まりある粘性の強い明赤褐色焼土
5　締まりのある黒褐色細砂
6　黄褐色ロームブロック　軽石３％含む

I　黄褐色ロームブロック
II　橙色焼土塊
III　暗赤褐色土塊
IV　締まりある黒褐色細砂
V　褐色微砂ロームと焼土に炭化物を混入

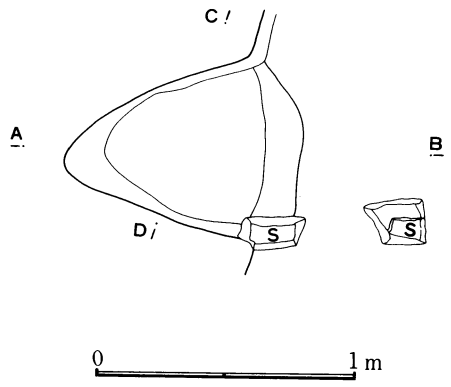
H－3・4号住居



H－3・4注記

1　やや締まるが粘性のない暗褐色細砂　ＣＰ・ＦＰ３％，炭化粒・シルト粒各１％含む
2　１と同質の黒褐色細砂　軽石３％シルト粒１％を含む
3　粘性なく柔らかい黒褐色細砂
4　褐色細砂　ロームブロック60％軽石３％を含む
イ　暗褐色細砂　ロームブロック30％軽石２％シルト粒１％含有
ロ　やや締まりのある黒褐色粗砂　ＢＰ60％混入
ハ　黒褐色細砂　ＢＰ30％ローム粒１％混入
ニ　黒褐色細砂ＢＰ20％ローム粒１％混入
ホ　締まり粘性のある黒褐色細砂　ＦＰ・ＣＰ２％ロームブロック５％シルト粒７％混入

Ⅰ　表土
Ⅱ　旧耕作土
Ⅲ　やや締まる暗褐色細砂　ロームブロック30％軽石３％含有
Ⅳ　やや締まる黒褐色細砂　ＣＰ・ＦＰ10％ローム粒５％混入
Ⅴ　粘性強くやや締まる黒褐色細砂　軽石３％ローム粒２％炭化粒１％混入
Ⅵ　やや締まる黒褐色細砂　軽石３％ローム粒２％炭化粒１％混入
Ⅶ　黒褐色細砂　ロームブロック30％軽石３％含有

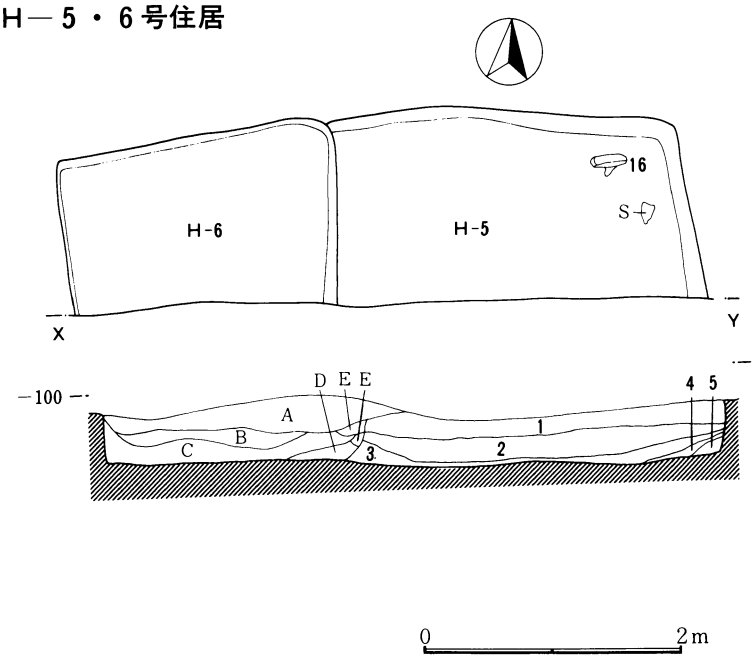


H－3号住居カマド平面図

竈の取り付け位置は南壁より2.26mにあり、東壁に対して主軸は約15°北に振れている。竈は燃焼部のみが残存しており、残存長は主軸で90cm、幅70cmを計る。

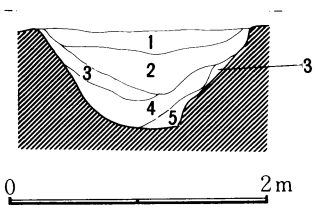
構築材として砂質凝灰岩の切石を利用している。左袖部分は本来の位置にあるが、他は住居跡内床面に四散していた。

H－5・6号住居



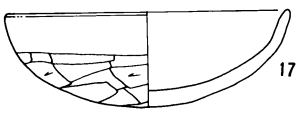
a　黒褐色細砂　軽石３％ローム粒２％焼土粒１％混入
b　黒褐色細砂　軽石５％焼土粒１％混入
c　黒褐色細砂軽石３％炭化粒１％ローム粒２％混入
d　締まり粘性のある黒褐色細砂　軽石２％炭化粒１％焼土粒１％混入
e　ロームブロック
1　締まり粘性を帯びる黒褐色細砂　軽石３％焼土粒２％炭化粒１％混入
2　やや締まる黒褐色細砂　ＣＰ・ＦＰ５％炭化粒２％焼土粒２％混入
3　黒褐色細砂　ＣＰ・ＦＰ３％炭化粒１％混入
4　やや締まる黒褐色細砂　軽石２％焼土粒１％ロームブロック５％混入
5　暗褐色細砂　軽石２％焼土粒１％ロームブロック５％混入

溝地層断面図

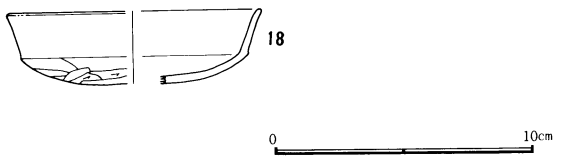


1　ややしまるが粘性のない黒褐色細砂　ＢＰ30％ローム粒１％含有
2　柔らかく粘性のない黒褐色細砂　ＢＰ60％ローム粒２％含有
3　粘性締まりのややある黒褐色細砂　ＢＰ10％ロームブロック５％含有
4　粘性締まりのややある黒褐色細砂　ＢＰ５％ロームブロック30％炭化粒１％含有
5　柔らかくやや粘性のある暗褐色細砂　ＦＰ１％ロームブロック80％混入

溝出土遺物



グリッド出土遺物



遺物について

区画整理時の客土の結果と思われるが、調査区内の表土中からは、縄紋時代の土器辺から、近世に至る陶器片まで様々な遺物が出土していた。これらの土器辺については、小辺がすべてであり、これらについては一括処理をして文化財保護課に収納してある。

H－1号住居跡からは、遺物番号2の甕が住居跡の中央西壁寄りの床面に密着して出土した他は、遺物番号1の甕が北側の竈内上部から押しつぶされた状態で検出され、他の遺物はいずれも竈周辺から出土している。遺物番号1から6までがこの住居跡の出土である。

H－2号住居跡からは、竈内にコの字口縁を示す甕の一部が、竈の上部から押しつぶされた状態で検出された他は、土師器の小破片が出土したのみで、接合・実測にたえる遺物は1点しか発見されなかった。遺物番号7が本住居跡の竈前から出土している。

H－3号住居跡は、区画整理によって住居跡の上部大半を削平されたためか、遺構のプラン確認の時点で多くの須恵器の破片が検出されたが、接合・実測にたえる物のうちでも底部から口縁部まで残存する遺物はなかった。いずれも東壁ぎわからの出土である。遺物番号8から14がこの住居跡から出土している。

H－4号住居跡からは、遺物番号15で示される、「く」の字を示す口縁の肉厚の甕が床面から出土している。これもほぼ一個体に近い破片が纏まって出土しているものの、接合段階ではその形状を復元することはできなかった。この甕の内面は、破片全てにススが付着していた。

H－5号住居跡は、その大半がH－6号住居跡に切られ、また南に続くと思われる部分は調査区外となるため一部分の調査でおわったが、住居内の北西隅から遺物番号16の砥石の断片が検出された。この砥石は使用面が著しく磨耗しておりその使用頻度の高さが窺われる。他の出土遺物は土師器の小破片のみであった。

H－6号住居跡からは、土師器片が出土しているが、これも接合・実測にたえる物はなかった。

溝からも土師・須恵器の破片が検出されているが、図化・写真の掲載にたえるものは地層断面のII層中から、遺物番号17で示される、全体的に丸みを帯びた傾向のある土師器の坏1点のみであった。

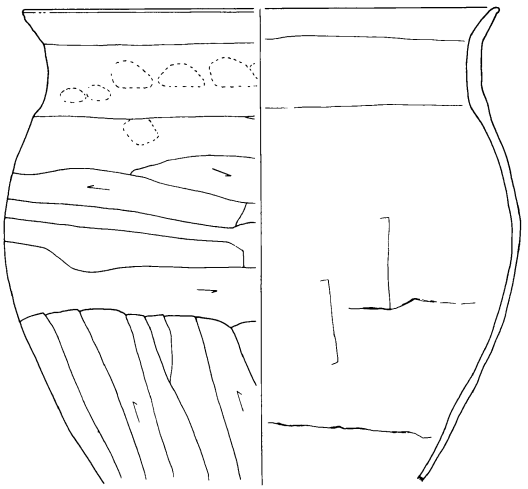
この土器は、胎土中にかなり荒い粒子の石英を多量に含んでおり、内外面ともその器肌は著しく荒れていた。おそらく、水流の影響ではないかと考えられる。

B－1グリッドから、遺物番号18で示される、鬼高期の特徴を顕著に示す有稜の須恵器の坏が出土しているが、出土地点の地面の精査では、直接遺構に結び付く結果は得られなかった。

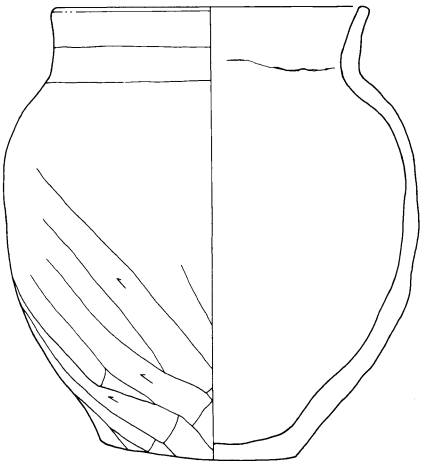
他に、縄紋時代の土器断片や古墳時代の土器断片、奈良・平安時代の土師・須恵器片等が検出されているが、いずれも小破片のみであり、遺物洗浄後一括して保管してある。

以上の結果から、実測・写真撮影にたえる出土土器は、大半が奈良・平安時代の住居を明示する土器であるが、重複した住居との関係や、この柿木II遺跡の南方100mで調査された和泉式の高坏を出土した膏薬遺跡の例から、それ以前の時代の集落があった地点に隣地の柿木遺跡を包括した集落が形成されたことが考えられる。

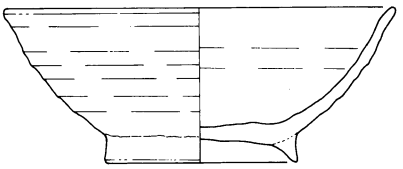
H－1・2号住居跡出土遺物実測図



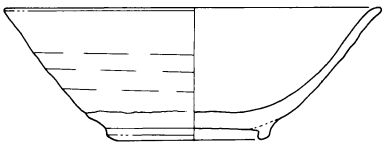
1



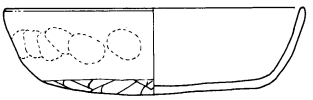
2



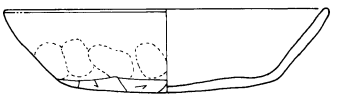
3



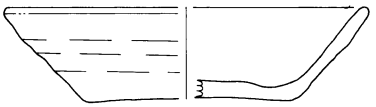
4



5

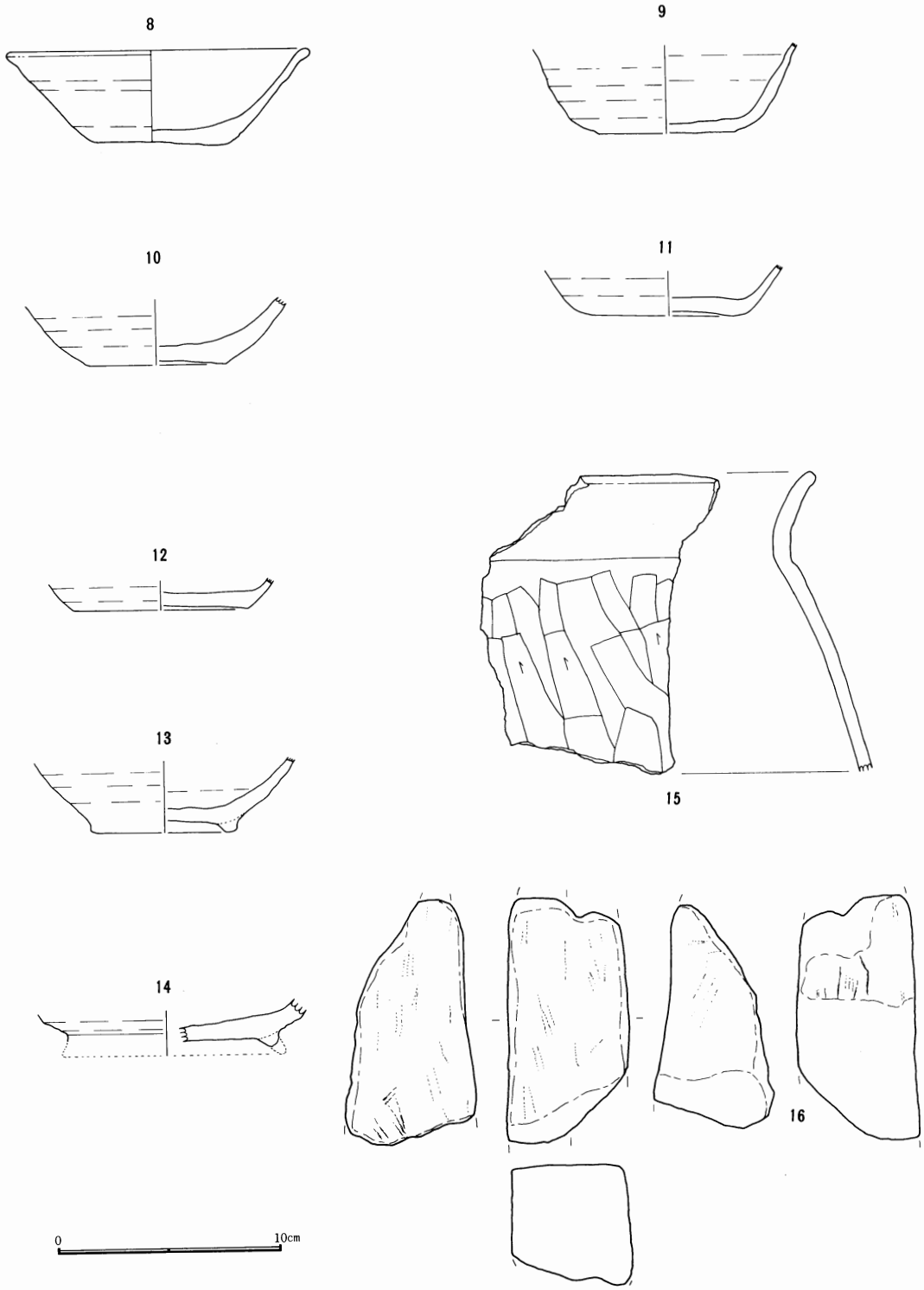


6



7

出土遺物実測図



遺物観察表

番号	器形	法量	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存 ④胎土⑤備考
1	甕一土師	18.1 (18.3)	コの字口縁 胴上半部に最大径を有す	口辺部横ナデ。体部上位は横方向の、下位は縦方向のヘラ削り。頸部に指圧痕あり	頸部横ナデ 体部ヘラ削り	①赤褐色②良好③1／3④石基・石英・長石を含む。密⑤外面に一部ススが付着
2	甕一土師	12.3 16 17.5	口縁部は緩く外反する 胴上部に最大径	口辺部から肩部にかけて横ナデ胴部斜方向ヘラ削り。底部ヘラ調整。器肌が荒れる。	口辺部横ナデ 胴部ヘラ削り	①黄褐色②良好③80%④長石・石基・石粒・軽石を含む。密⑤胴下位から底部にかけて一部吸炭
3	高台碗一須恵	15 6 7.5	顕著な段を有する 口縁部外反	ロクロ成形後回転糸切り。高台部ヘラ調整。	水挽き整形	①灰白色、内部青灰色②良③2／3④6㎜径石粒・輝石・長石を含む。粗⑤中心部吸炭。軽量
4	高台碗一須恵	14.5 5.1 6.3	体部中程より薄肉となる	ロクロ成形後回転糸切り。貼高台ヘラ調整。	水挽き整形	①灰色。一部赤黄褐色、黒色部あり②良③3／4④4㎜径チャート・石英・輝石を含む。密
5	坏一土師	11.2 3.4	体部やや外反する 口縁部内湾	口縁部横ナデ。底部ヘラ削り。指圧痕あり	底面の一部にかかる横ナデ	①茶褐色②良③2／3④輝石・軽石粒を含む。良⑤底部に吸炭あり
6	坏一土師	12.5 3.2	体部が緩やかに外反する　口縁部内湾	口縁部横ナデ。底部ヘラ削り。	底面の一部にかかる横ナデ	①茶褐色②良③85%④輝石・軽石粒を含む。良
7	坏一須恵	13.8 3.7	体部と一体で口縁が緩やかに外反する	ロクロ成形。底部回転糸切り後外周部ヘラ調整	水挽き整形	①灰白色。内面褐灰色②良③3／5④粗。輝石・石英・軽石・石基・粗石粒を含む
8	坏一須恵	13.6 4.3	体部緩やかに外反し、口縁部でさらに外反する	ロクロ成形。底部糸切り後、外周部ヘラ調整	水挽き整形	①灰褐色。内部黄褐色②やや良③2／3④粗。輝石・軽石粒を含む。
9	坏一須恵	(11.9) (4)	体部中程より口縁にかけ肉薄となる	ロクロ成形。底部糸切り後ヘラ調整	水挽き整形	①灰白色②良③1／3④粗。輝石・軽石の微粒を含む
10	坏一須恵	(11.6) (3)	肉厚	ロクロ整形。底部糸切り後ヘラ調整。	水挽き整形	①灰白色。内部灰褐色②良③底部の3／4④良⑤一部吸炭あり
11	坏一須恵	(10.7) (2.3)	薄手	ロクロ成形。底部糸切り	水挽き整形	①黒灰青色②焼成温度低い③③底部の3／4④良。2～4㎜径石粒・輝石・石英・長石を含む
12	坏一須恵	体部肉薄		ロクロ成形。底部糸切り後　貼高台ヘラ調整	水挽き整形	①青灰色②良③底部の1／3弱④やや良。輝石・長石・軽石を含む⑤断面も黒色
13	高台碗一須恵	(11.6) (3.3)	体部の下から丸みを持つ	ロクロ成形。底部糸切り後　貼高台ヘラ調整	水挽き整形	①内外とも黒色②良③1／2④良。輝石・長石・軽石粒を含む⑤断面も黒色
14	高台碗一須恵			ロクロ成形。底部糸切り後　貼高台ヘラ調整	水挽き整形	①青灰色。外面の一部褐色②焼成温度低い③底部の1／2④良
15	甕一土師		丸みを帯びて「く」の字に外反	口縁部横ナデ 体部縦方向ヘラ削り	ヘラ削り	①茶褐色②良④粗。輝石・長石・軽石・石粒を含む⑤内面は他の小破片ともススが付着
17	坏一土師	11.1 3.8	丸みを帯び口縁部は立ち上がり気味である。	口辺部横ナデ 底部ヘラ削り		①赤褐色②良③100%④4㎜径長石粒、5㎜径輝石粒を含む
18	坏一須恵	9.6 2.9	有稜の体部。体部開く	口辺部横ナデ 底部ヘラ削り	横ナデ	①青灰色②良③1／2④良好⑤内面と外面の一部黒灰色

ま と め

柿木II遺跡は、古代上野国の中枢をなす地域の一角にあたり、本調査においても古代集落の実態を探る上で貴重な資料を得ることができた。清里南部遺跡群・中島遺跡・北原遺跡・下東西遺跡そして本遺跡の西側にあたる関越高速道における大規模な調査によって、徐々にその実情が解明されつつある。

本遺跡の位置する周辺では、本遺跡の北東に接して柿木遺跡、そして南東約115mには膏薬遺跡が存在し、古代の隆盛の跡を窺い知ることができよう。

しかし、本遺跡に接する道路を隔てたすぐ西側においては、その後の試掘調査においても約30cmの深さでローム層が現われ、遺構の存在は認められなかった。この周辺は、昭和40年代に区画整理が実施されており、所によっては削平を受けたことにより遺構が殆ど残されていない状況もある。本調査区においても、柿木遺跡の傾向と同様に、西北から南東にかけての傾斜地であったことが判明しており、D－1グリッド内のトレンチ調査で、焼土は残っているものの、住居プランの全く確認できない遺構が存在している。また、調査区の西に行くにしたがって住居の残存状況が悪化していることからも、区画整理時に削平の影響を強く受けているものと考えられる。

この調査によって判ったことは、全ての住居跡で、柱穴が全くなかったことと、同じく貯蔵穴が無いことである。本遺跡内のH－1・2号住居跡とH－3号住居跡は、遺構内の出土遺物から判断して、柿木遺跡と同じく奈良・平安時代の住居跡であり、同遺跡と同一集落を形成していたものと考えることができよう。他の住居については、十分な資料を得るにいたらなかったので、時代的属性や、集落形成についての結論を出すには早計に過ぎよう。

また、調査区の中央を走行する溝は、そう遠くない下流で柿木遺跡で検出された溝と合流するものと思われるが、双方の遺跡地とも溝の左右に住居跡があり、溝が集落を区画するものではなかろう。調査区の東約70mの現道路下に数十年前まで、子供が泳げる程の女堀と呼ばれる水路が存在したということであるが、この女堀の調査例が無いため、これと溝との関連も不明である。今後の調査を待ちたい。

参考文献

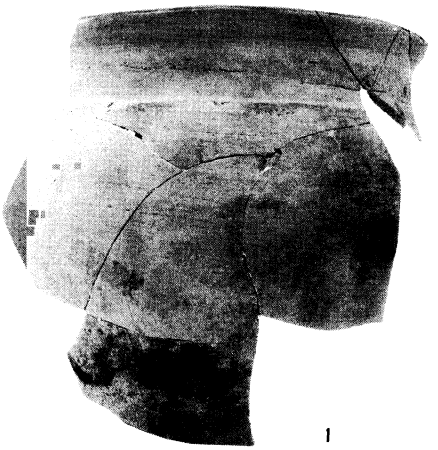
柿木遺跡　1984　前橋市教育委員会

おわりに

本遺跡の調査にあたって、群馬中央倉庫株式会社に全面的協力を得、作業員さんの手配等もして戴いた。発掘経験の無い方々ではあるが、一人でも多くの方々に発掘の体験をして戴くことは、埋蔵文化財の普及のために基本的かつ最も大切な事であると思われる。それぞれの皆さんが、懸命の作業に従事してくれたことに助けられ、調査は頗る順調に進展した。短期間の調査ではあったが、旺盛な知識欲を根底に、古代史解明を手がける喜びを日一日と増していったことは、熱心な作業によって、痛切に感じとることができた。

前橋市は今、全市を挙げて生涯学習に取り組んでいるが、これを契機に生涯学習のテーマの一つとして、考古学への興味を深めて戴ければ、このうえない幸とするところである。

群馬中央倉庫株式会社と作業に従事してくださった皆さんに、併せて深甚の感謝を申しそえるものである。



1

2

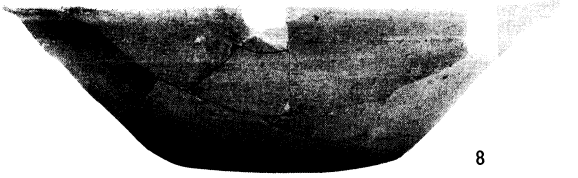
3

4

5

6

7



8

9

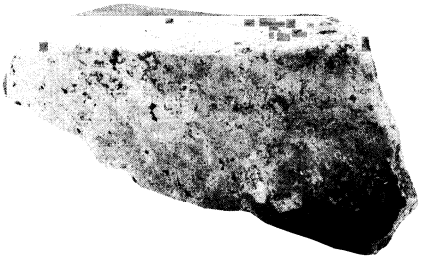
10

11

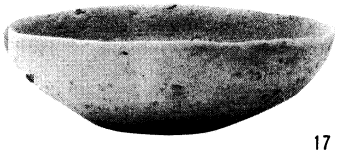
12

15

13



16



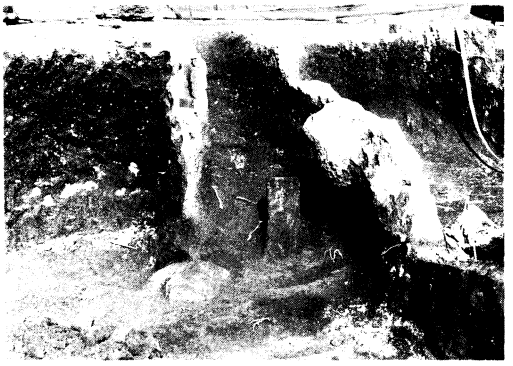
17

18

調査区遠景

作業風景

H-1·2号住居跡



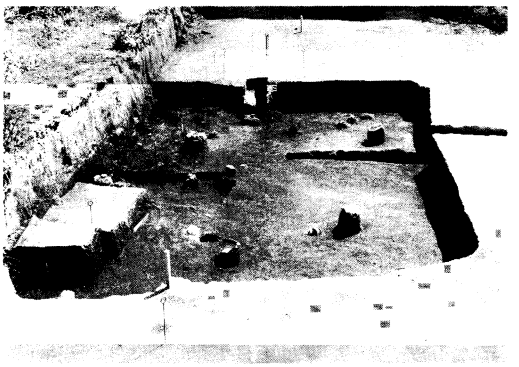
H-1号住居跡 北側カマド

H-1号住居跡 北側カマド

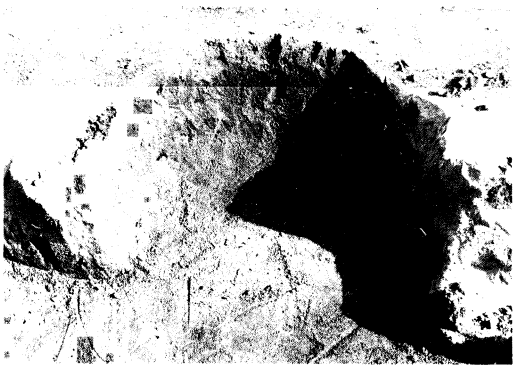
H-1号住居跡 カマド断面

H-2号住居跡 カマド

H-1号住居遺物出土状況



H-3・4号住居跡



H-3号住居跡カマド残欠

溝断面

作業風景

調　査　要　項

遺跡名称	柿木II遺跡
遺跡所在地	群馬県前橋市高井町1丁目
遺跡記号	63A30
調査期日	表面調査　昭和61年4月9日
	試掘調査　昭和61年6月9日
	発掘調査　昭和63年4月19日～昭和63年5月9日
調査面積	約1230m^2
開発面積	約1230m^2
調査原因	民間開発（倉庫建設）
調査依頼者	群馬中央倉庫株式会社　社長　尾崎博治
調査主体者	群馬県前橋市教育委員会　教育長　岡本信正
事務局	管理部長　二瓶益巳　文化財保護室長　福田紀雄　埋蔵文化財係長　浜田博一
調査担当者	遠藤和夫・新保一美
調査参加者	岩田あけみ　賀来幸雄　水口幸子　井上はつえ　中島澄子　柳井たけ
	木村澄美子　石関佐恵子　小見君江　山口静子　根井起美枝

柿木II遺跡（63A30）

印刷　平成2年2月20日
発行　平成2年2月24日
発行者　前橋市教育委員会
前橋市大手町2－12－1
印刷所　有限会社檸檬企画
前橋市稲荷新田町406-2